

半七捕物帳

歩兵の髪切り

岡本綺堂

青空文庫

前回には極ごくげつ月十三日の訪問記をかいたが、十二月十四日についても、一つの思い出がある。江戸以来、歳としの市いちの始まりは深川八幡で、それが十四、十五の両日であることは、わたしも子どもこどもの時から知っていたが、一度もその実況を観たことが無いので、天気の良いのを幸いに、俄かに思い立って深川へ足を向けた。

今と違って、明治時代の富岡門前町の往来はあまり広くない。その両側に露店なるらが列ならんでいるので、車止めになりそうな混雑である。市商人いちあきんどは大かた境けいだい内に店を出しているのであるが、それ

でも往来にまでこぼれ出して、そこにも此処にも縁起物を売っている。それをうかうか眺めながら行きかかると、路ばたの理髪店から老人が出て来た。

「やあ」

それは半七老人であつた。赤坂に住んでいる老人が深川まで髪を刈りに来るのかと、わたしも少し驚いていると、それを察したように、彼は笑つた。

「山の手の者が川向うまで頭を刈りに来る。わたくしのようにまじん閑ひ人まじんでなければ出来ない芸ですね。いや、わたくしだつて始終こ

こらまで来る訳じゃありません。ついである時に寄るんです

よ」

ここの理髪店の主人は、そのむかし神田とこに床を持っていて、半七老人とは江戸以来の馴染なじみであるので、ここらへ来たときには立ち寄って、鋏はさみの音を聴きながら昔話をする。それも一つの楽しみである、老人は説明した。

「きょうも八幡様の市いちへ来たので、その足ついでに寄ったのです。が……。あなたは何処へ……」

「わたしも市を觀に来たんですが……」

「はは、今の若い方にしちやあお珍らしい。帰りは洲崎すゞきへでもお廻りですか」と、老人は笑いながら云った。

「いや、そんな元気はありません」と、わたしも笑った。

二人は話しながら連れ立って境内にはいった。老人は八幡の神

前でうやうやしく礼拝していた。そこらを一巡して再び往来へ出ると、老人はどこかで午飯ひるめしを食おうと云い出した。宮川みやがわの鰻もきようは混雑しているであろうから、冬木ふゆきの蕎麦にしようと、誘われるままにゆくと、わたしは冬木弁天の境内に連れ込まれた。名月や池をめぐりて夜もすがら

例の芭蕉の句碑の立っている所である。蕎麦屋と云つても、池にむかった座敷へ通されて、老人が注文の椀盛や刺身や蝦の鬼がら焼などが運ばれた。池のみぎわには蘆あしか芒すすきが枯れ残っていて、どこやらで雁かりの声こゑがきこえた。

「静かですね」と、わたしは云つた。

「ここらもだいぶ変つたのですが、それでも赤坂やなんぞのよう

なもののじゃありません。さすがに江戸らしい気分が残っていますね」と、老人も云った。「今もあの髪結床かみいどこの爺さんと話して来たんですが、髪結床だつて昔とは違いましたね。それでもまだチヨン髷を結いに来る客があるそうです。今は爺さんが引き受けているからいいが、その爺さんがいなくなつてからチヨン髷が来たらどうしますかな。尤もその頃には、そんなお客も根絶やしになりましょうが……。はははははははは

老人の口から江戸の髪結床のむかし話を聴かされたのは、三馬の浮世床を読まされるよりも面白かつた。それからそれへと質問を提出して、わたしは興に入つて聴いていると、老人はこんなことを云い出した。

「今こんにち日ではザンギリになつても坊主になつても問題はありませ
んが、昔は髪を切るといふのは大変なことで、髪を切つて謝あやまると
いえば大抵のことは勘弁してくれたものです。それだけに又、な
にかの腹癒せに、あいつの髪を切つてやろうなどと云つて、女や
男の鬻まげを切ることもある。つまりは顔でも切る代りに鬻を切るの
だから、大難が小難で済むようなものですが、昔の人間はそうは
思わない。鬻を切られるのを首を切られるほどに恐れたものです」
「女の髪切りなぞということが流行つた事があるそうですね」
「髪切りは時々流行りました。あれは何かのいたずらか、こん
にちの言葉でいえば一種の色情狂でしょうね。そういうたぐいの
髪切りは、暗いときに往来で切られるので、被害は先ず女に決ま

つていましたが、それとは違つて、家のなかで自然に切られる事がある。寝ているうちに切られる事がある。これは別に流行ということも無いので、誰の仕業しわざだか判りません。なにかの魔物の仕業だろうと云うことになっていました」

「これも女が多いんですか」

「やつぱり女が多かつたようです。若い女が眼をさまして見ると、島田鬻が枕元にころりと落ちてゐる。これは泣き出すのが当たりまえでしょう。しかし女には限りません。男だつて切られる事があります。歩兵屯とんじよ所の一件などがそうです。なにしろ十一人も次から次へと切られたのですからね」

こうなると、鬼がら焼などはどうでもいい。わたしはくずしか

けている膝を直した。

「歩兵屯所……。幕府の歩兵ですか」

「そうです」と、老人はうなずいた。「なにしろ幕末は内も外もそうぞうしくなったので、幕府では旗本や御家人の次三男を新規に召し出して、別手組というものを作りましたが、また別に歩兵隊を作ることになりました。これは一種の徴兵のようなもので、関東諸国の百姓の次三男をあつめて、これに兵式の教練をさせたのですが、元治元年の正月から募集をはじめて、その年の七月までには一万人ほどになりました。最初の趣意では、前にも申す通り、なるべく正直律義りちぎの百姓ばかりを集めて、真剣に教練するつもりであったのです。こんにちと違いました、その頃に一万人の

兵があれば心丈夫です。ところが、その募集が思うように行かないで、しまいには誰でも構わずに採用することになって、江戸近在のやくざ者までが紺木綿の筒袖を着て、だん袋のようなものを穿いて、鉄砲をかついで歩くことになったので、世間の評判が余り好くありませんでした。勿論、みんながみんな悪い人間じゃあない、維新の際に命をすてて働いたのもあるのですが、何分にもごろつきのような奴がまじっていて、これが歩兵を笠かぶにま着て乱暴を働く、三人か五人固まって歩いて、芝居町まちで暴れる、よし原で喧嘩をする、往来で女にからかったりする。これじゃあ市中の評判もよくない筈ですよ」

「その一万人はどこに屯たむろしていたんです」

「四組に分かれて屯していたのですが、髪切りの一件がおこったのは神田小川町おがわまちの屯所で、第三番隊というのでした。なにしろ一個所に二千人以上の歩兵が屯しているのですから、幾棟もの大きい長屋が続いていまして、そこにみんな寝起きをしている。その中に広い練兵所があつて、毎日調練の稽古をするという仕組みです。今から考えれば外国風の軍隊組織で、四十人が一小隊、三小隊が一中隊、五中隊が一大隊ということになっていたように聞いています。そんなわけですから、一小隊ごとに長屋を区別して別々に住んでいました。その小隊四十人のうちで、十一人も髪切りに出逢つたので大騒ぎになりました」

「寝ているところを切られたんですか」

「それがいろいろで、起きてみると鬻が落ちているのもある。歩いているうちに鬻が飛ばされるのもある。ひと晩に十一人が切られたのではなく、二十日はつかばかりの間に切られたのですから、まあふつか二日に一度ぐらいの割合ですが、それにしても大騒ぎ、幕府の歩兵たるものが何者にか鬻つ節をぽんぽん切られたとあつては、寝首を搔かれたも同然、歩兵隊の面目にもかかわるといふ騒ぎです」

「そりゃあ騒いだでしょう」

「騒ぐのも無理はありません。そこで、切られた人たちの話を聞きますと、二度目に切られた鮎川丈次郎というのは、夜なかに起きて便所へ行くと、その帰り道の暗い廊下で何か不意に飛びつい

た者がある。おどろいて払いのけると、その手ざわりで天鷲絨びろうどかけもの獣の毛のように思われたそうで、部屋へ帰つてみると鬣が無い。五度目に切られた増田太平というのは、外から帰つて来て長屋へはいろいろとすると、暗いなかにかうずくまつているような物がある。犬でもはいつたのかと思つて、足のさきで軽く蹴ると、それが飛び起きて増田に突きあたつた。その勢いに増田はよろけて倒れそうになつたが、そのまま内へはいつてみると、これも鬣が飛んでしまつたと云うわけです。増田に突き当たつたのも鮎川と同様、天鷲絨か毛皮のような肌ざわりで、暗いなかで確しかとは判らなかつたが、犬よりも大きい物らしかつたと云うのです。ほかの九人は寝ているうちに切られたのもあり、いつ切られたか知らな

いのもあり、ともかくも心あたりのあるのは鮎川と増田の二人だけで、その話も大抵一致しているのです」

「じゃあ、獣らしいんですね」

「まあ、そうですね」と、老人は又うなずいた。

「誰が云いだしたのか知りませんが、江戸時代では斯こういうたぐいの髪切りを、一種の魔物の仕業しわざと云い、又は猿か狐の仕業だと云い慣わしていました。そこで、前の鮎川に飛び付いたのは、猿の仕業らしくもある。後の増田に飛びかかったのは、狐らしくもある。まあ、なんにしても獣の仕業らしいと云うことになりました。屯所の方でも、こんな事はなるべく秘密にして置きたかったです。でしようが、人の口に戸は立てられません。殊にこんな噂は猶

さら広がり易いもので、忽ち世間の評判になつてしまいました。ところが、おかしいことには、今度の髪切りは狐でもなく、猿でもなく、ひよう豹の仕業だという噂でした」

髪切りを猿や狐の仕業というのは、昔の人としてさもありそうな事であるが、豹というのは余りに奇抜であつた。

「豹の仕業……」とわたしは首をかしげた。「それはどういふ訳ですか」

「はは、今の人にはお判りのないことで……」と、半七老人は笑つた。「幕府の歩兵には、豹だの、茶袋だのといふ^{あだな}綽名が付いていました。将棋の駒の歩は^ふ歩兵で、つまりは^{ほへい}歩兵の意味です。そこで幕府の歩兵を将棋の歩になぞらえて^{ひよう}歩といひ、それが転じ

て豹になったのです。歩兵は紺木綿の服を着ていましたが、夏の暑いあいだは茶色の麻を着ていたので、茶袋という名を付けられたわけで……。豹にしても、茶袋にしても、あんまり有難い名前じゃありません。これを見ても、その不人氣が思いやられます。その豹の髪を切ったのだから、やっぱりお仲間の豹だろうという、いや、どうも悪い洒落しやれです。

もう一つ、豹と云い出したわけは、二年ほど前に西両国で豹の観世物を興行した事がありました。珍らしいので、一旦は流行りましたが、そう長くは続かないので、後には両国を引き払って、諸方の宮地や寺内で興行したり、近在の秋祭りなぞへ持ち廻ったりしていました。その豹が逃げたと云うので、いろいろの噂が立

っている。王子辺では子供が三人啖くい殺されたなぞと云う。もちろん取り留めもない事なのですが、そんな噂のある矢さきへ今度の髪切り騒さわぎが出しゅつ来たいしたので、歩兵の豹から思いついて、恐らくその豹の仕業だろうと云うことになったのです。今から考えれば、ばかばかしいことですが、その当時にはまことしやかに吹ふ聴いする者がある、又それを信用する者がある。まったく面白い世の中でした」

二

読者を焦じらすようであるが、ここで私もすこし困った。と云う

のは、半七老人も余り多くの酒を飲まないで、女中がもう飯を運んで来た。二人はだまって飯を食ってしまった。そうになると、ここに長居も出来ない。おまけに老人はこれから本所ほんじょうの知人を尋ねると云うので、一緒に付いてゆくことも出来ない。残念ながら髪切りの話はここでひと先ず中止のほかは無かった。わたしは元の富岡門前で老人に別れた。

しかし、半分聞きかけの話をそのままにして置くのは、わたしの性質として何分にも気が済まないのです、その明くる晩、寒い風を衝ついて赤坂へ出かけると、老人はすこし感冒の気味だと云うので、宵から早く床にはいつていた。その枕もとで手帳を取り出すわけにも行かないので、わたしは忽そうそう々に帰って来た。

それから二日ほど過ぎて、見舞いながら又たずねて行くと、老人はもう起きていたが、今度はあいにく来客である。わたしは又もやむなく帰った。わたしも歳末は忙がしいので、冬至とうじの朝、かどぐち門口から歳暮の品を差し置いて来ただけで、年内は遂にこの話のつづきを聞くべき機会に恵まれなかった。

あくる年の正月五日の午後、赤坂へ年始まわりに行くと、老いてますます健すこやかな老人は、元気よく新年の挨拶を述べた。それからいつもの雑談に移ると、早くも老人の方から口を切った。

「旧冬、冬木でお話をした歩兵の髪切りの一件……。そのあとをお話し申しましょうかね」

「どうぞお願いします」

私はそれを待ち構えていたのである。老人は例の明快な江戸弁で、殊に今夜は流暢に語り出した。

この一件は慶応元年の二月から三月にかけての出来事で、半七が小川町の歩兵屯所へ呼び出されたのは三月二十五日の朝であった。小隊長の根井善七郎は半七を面会所へ通した。

「世間の噂でおまえも大抵承知しているだろうが、どうも困ったことが出来た。一人や二人ならばともかくも、それからそれへと二十日ばかりの間に十一人も鬚を切られた。こういう事は人騒がせで甚だ宜しくない。第一に世間の手前もある。猿だの、狐だの、豹だのと、いろいろの風説が伝えられているので、当方でも見付

け次第に撃ち殺すつもりで、銃を持った者が毎晩交代で見廻っているが、けもの獣らしい物の姿も見あたらぬ。罾わなをかけたが、それにもかか罹らない。こうなると、どうも獣の仕業でないらしく思われるので、きようはお前を呼び出したのだが、なんとか一つ働いてみてくれまいか」

歩兵隊の者がかたはし片端から鬚を切られたなどと云うことは、当人たちの不面目ばかりでなく、ひいては歩兵隊全部の面目にも関し、さらに公儀の御威光にもかかわる事であると、根井は云った。さなきだに余り評判のよくない歩兵隊であるから、こんな事が出しゅっ来たいすると世間では尾鱗おひれをつけていろいろの悪い噂を立てる。小隊長の根井も心配して、なんとか早くその正体を見あらわしたい

と焦^{あせ}っているのも無理はなかった。

「まったく困ったことでございます」と、半七も云った。「わたくし共の手に負えることだかどうだか判りませんが、まあ精々働いて見ましよう」

「では、長屋の内部をひと通り見てくれ」

根井は半七を案内して、第二小隊の長屋へ連れて行くと、今は調練の時刻であるので、小隊全部は練兵所へ出ていて、広い長屋に人の影は見えなかった。長屋には台所が付いていて、台所の外には新らしく掘られたらしい井戸があつた。大きい炊事場は別の所にあつて、歩兵が当番で炊事を受け持ち、それを各隊の長屋へ分配するので、この小さい台所はめいめいが水を飲んだり、顔

を洗ったりする場所に過ぎないと、根井は説明した。

長屋の内は一棟を二つに仕切つて、ふち無しの琉球畳を敷きつめ、板戸の戸棚にはめいめいの荷物が入れてあるらしかった。元来が一種の道場のような伽藍洞がらんどうの建物であるから、別に半七の注意をひくようなものも見いだされなかつた。彼はここを出て、さらに長屋の周囲を一巡した。

その当時の内神田はこんにちの姿とまったく相違して、じんぼう神保町、ちよう猿樂町、さるがくちちよう小川町のあたりはすべて大小の武家屋敷で、

まちや町屋は一軒もなかつたのである。小川町の歩兵屯所も土屋うねめの采女

しょう正ながとのかみと稲葉長門守の屋敷の建物はみな取り払われて、ここに新

らしい長屋と練兵の広場を作つたのであるが、ある一部には昔の

庭の形が幾分か残されている所もあつた。第二小隊の井戸のそばには築山があつた。この築山も昔は相当の手入れをして、定めて風致あるものと察せられたが、一年あまりの後には荒れに荒れて、六、七本の立ち木がおい茂っているばかりであつた。そのなかに八重桜の大樹が今を盛りに咲き乱れているのを、風流氣の乏しい半七も思わず見あげた。

「よく咲きましたね」

「むむ、よく咲いた」と、根井も見あげた。「伐るのも惜しいのでこうして置くが、桜もこんなところで咲いては張り合いがあるまい。なにしろ殺風景の世界だからな」

二人は笑いながら元の面会所へ歸つた。ここで何かの打ち合わ

せをして、半七は屯所の門を出ると、ひとりの若い女の姿が眼の前に見えた。女は門番と何か立ち話をして立ち去るらしい。よく見ると、それは湯島天神下の藤屋という小料理屋の女中であつた。

「おい、おい、お房。どこへ行くのだ」

「あら、親分さん」と、お房は会釈えしやくした。「よいお天気で結構でございます」

「おめえは今その番人となんの内証なしみばなしをしていたのだ。お馴染なしみかえ」

「ええ、少し用があつて……。これで三度も足を運ぶんですけれど……」

「そんなに逢いてえ人があるのか」と、半七は笑つた。「もつと

もひと口に茶袋とも云えねえ。あの中にもなかなか粹あにな兄あにいがまじっているからな」

「あら、御冗談を……。そんなのじゃあ無いんですよ。おかみさんさんにやあ叱ちられるし、ほんとうに困こつてしままううんですよ」と、お房は顔をしかめた。

「ははあ、勘定取りかえ。あんまりいい役じゃあねえな」

「いい役にも、悪い役にも、まったく困こるるんですよ」と、お房は繰り返して愚痴ぐちらしく云いつた。

この正月のはじめに、馴染の歩兵が四人連れで藤屋へ飲みに来たが、帰る時になつて勘定を貸してくれと云う。そのときに座敷を受け持もつていたのは女中のお房で、何分にも相手は歩兵であり、

春早々から乱暴などを働かれても困る。殊にいずれも馴染の顔であるから、お房も無下むげにことわり兼ねた。その勘定をあしかけ三み月つきの今になつても払つてくれないと云うのである。

「おめえの一存で貸したのかえ」と、半七は訊きいた。

「帳場へ行つておかみさんに話すと、おまえ大丈夫かえと云うんです。ええ大丈夫でしょうと、あたしが云つたので、おかみさんも承知して貸すことになつたんです。それが今まで埒らちが明かないので、おかみさんはあたしを叱つて、おまえが請け合つたんだから、催促して取つて来いと云う。そこで、このあいだから催促に来るんですけれど、今は調練の最中だから面会は出来ないの、きようはドンタクで外出したのと云つて、いつでも逢わせてくれな

いんです」

「そりやあ困るな」

歩兵の連中は門番にたのんで、藤屋の女が来たならば追い返してくれと云つてあるに相違ない。お房が幾たび足を運んでも、おそらく埒は明くまいと思つた。

「第二小隊の人達は割合におとなしいようですけれど、やっぱりいけないんですねえ」と、お房は又云つた。

「第二小隊……。その四人はなんという人だえ」

「鮎川さん、三沢さん、野村さん、伊丹さんです」

「鮎川さん……。丈次郎というのか」

「ええ、丈次郎というのです」

鮎川丈次郎は二度目に鬚を切られた男である。半七は笑った。

「ほかの人は知らねえが、その鮎川さんはおめえの所へ顔出しは出来ねえ筈だ。えてものにちよん切られたのだからな」と、半七は自分の鬚を指さした。

「あら、それじゃあ鮎川さんも……。まあ」

お房も髪切りの噂を知っているらしく、ひどく驚いたように半七の顔を見あげた。

三

その当時の半七は神田三河町ちように住んでいたのであるから、小川

町まちから遠くない。お房に別れてひと先ず自分の家へ帰ると、亀吉と弥助が待っていた。

「屯所へ呼ばれたそうですね。髪切りの一件ですかえ」と、亀吉はすぐに訊いた。

「そうだ、猿や狐じゃあ無さそうだと云うのだ」

半七からひと通りの話を聞かされて、二人はかんがえていた。

「しかし、その築山というのがおかしい。そこに何か巢食っているのじゃありませんかね」と、弥助は云い出した。「去年の長州屋敷の一件もありますからね」

蛤はまぐりごもん御門

の事変から江戸にある長州藩邸はみな取り壊しにな

ったが、去年の八月、麻布りゆうどちよう竜土町の中屋敷を取り壊した時に

は、俄かに大風が吹き出したとか、奥殿から大きい蝙蝠こうもりが飛び

出して諸人をおどろかしたとか、種々の雑説が世間に伝えられた。

古い大名屋敷には往々そんな怪談が付きまとうので、屋敷跡の屯

所の築山にも古狐か古猫のたぐいが棲んでいないとは限らない。

かきがらちよう

蠣殻町

の有馬の屋敷の火の見櫓やぐらには、一種の怪物が棲んでい

たのを火の番の者に生け捕られ、それが瓦版の読売の材料となつ

て、結局は有馬の猫騒動などという飛んでもない怪談を作りあげ

てしまった。そんな例はほかにもある。したがって、亀吉や弥助

はこの一件について、まだ幾分の疑いを懐いだいているらしかった。

「世間じゃあ豹だなぞと云うが、まさかに豹が町なかへまぐれ込

みもしめえが……」と、亀吉も云った。「何かやっぱり狐か狸が

いたずらをするのじやありませんかね。現にその二人は、獣のよ
うなものに出逢つたと云うじやありませんか」

「そんな事がねえとも云えねえが、小隊長の云う通り、どうも人
間らしい匂いがするな」と、半七は笑つた。

「だが、なぜそんないたずらをするのか、そのわけが判らねえの
で、どこから手を着けていいか見当が付かねえ。こうなると、な
んでも手掛かりのある所から手繰たぐつて行くよりほかはねえ。弥助、
おめえは、天神下に行つて、藤屋のお房という女をしらべてくれ。
なるべく当人に覺さとられねえようにするがいいぜ。亀、おめえは鮎
川という歩兵の出這入りに気をつけてくれ。きょうの様子じやあ、
お房と鮎川とは訳があるかも知れねえからな」

「茶袋め、しやれた事をしやあがる」と、亀吉も笑った。「ようがす。よく気を付けましよう」

「お房には兄貴がある筈で、そいつは何か小博奕なんぞを打つ奴らしいですよ」と、弥助は云った。「ひよつとすると、その茶袋もやくざ者で、隊へはいらねえ前からお房を識っているのかも知れませんか」

「じゃあ、色の遺恨で誰かがちよん切ったかな」と、亀吉はすこし考えていた。「だが、切られたのは十一人だと云うから、まさかみんなが色の遺恨を受ける覚えもあるめえ。そんなに色男が揃っているなら、茶袋だって世間から可愛がられる筈だ。まあ、なにしろ行って来ます」

二人は忽々に出て行つた。髪切りが人間の仕業であるとするれば、普通のいたずらとしては余りに念入りである。何者がなんの為にそんないたずらをするのかと、半七は午ひるめし飯をくいながら考えた。そうして、おぼろげながら一つの推測をくださった時、子分の幸次郎が忙がしそうにはいつて来た。

「親分。早速ですが、いい話を聴いて来ました」

「いい話……。金でも降つたというのか」

「まぜつ返しちやあいけねえ。実はゆうべ、浅草の代地だいちぎし河岸のお園そのという女の家うちへ押込みがはいつて、おふくろと女中の物には眼もくれず、お園の着物をいっさい担ぎ出してしまいました。それだけなら珍らしくもねえが、出ぎわにお園の鬚を根元からふつつ

りと切つて、持つて行つたそうです」

「お園というのは何者だ」

「以前は深川で芸者をしていたのを、ある旦那に引かされて、おふくろと女中の三人暮らしで、代地に囲われているのです。年は二十三で、ちよいと蹈める女です。商売あがりの女だから、昔の色はいきさつで鬻を切られる位のことはありそうですが、それにしちやあ着物をみんな担ぎ出すのは暴つあらぽい。といつて、唯の押込みなら鬻まで持つて行くにやあ及ぶめえ。その押込みは二人連れだと云うことです」

「悪いはやり物だな」と、半七は舌打ちした。

「屯所の一件が評判になつているので、何が無しに髪切りの真似

をしてみたのか、それとも何か仔細があるのか、どっちでしょうね」と、幸次郎も判断に迷っているらしかった。

おそらく無意味の真似であろうと、半七は思った。それでも彼は念のために訊いた。

「お園の旦那は誰だ」

「内証にしているので判らねえが、なにしろ町人じゃありません。近所の噂じゃあ、旗本の殿さまか、大名屋敷の留守居か、そんな人らしいと云うのですが……」

「旦那は屋敷者か」

「着物なんぞを取られたのは仕方もないが、鬚を切られちゃあ旦那に申し訳がないと云って、お園は半気ちがいのように泣いて騒

いで、あぶなく代地の河岸から飛び込みそうになったのを、おふくろと女中が泣いて留める。近所の者も留めに出る。いや、もう、大騒ぎだったそうですよ」

「旦那が屋敷者となると、この髪切りも人真似とばかり云つていられねえ。その旦那は何者だか、突き留める工夫くふうはねえか」

「そりやあ訳はありません。おふくろや女中にカマを掛けて訊いても判ります。その旦那は近所の小岩という駕籠屋から乗つて帰ることもあるそうですから、駕籠屋に訊いても、屋敷の見当は大抵付くというものです。すぐに調べて来ましよう」

「その旦那が歩兵隊に係り合いのある人間なら、この一件が又おもしろくなって来るからな」と、半七はまったく面白そうに云つ

た。

幸次郎が出て行つたあとで、半七は又しばらく眼を瞑とじて考えていた。この一件について、自分は最初から一つの推測を持ってゐるのであるが、それが適中するかどうか。代地の髪切り事件も、解釈のしようによつては、いよいよ自信を強める材料とならないでも無い。半七は少なからざる興味をもつて、子分らの報告を待つていた。

この春はめずらしく火事沙汰が少なかつたが、夕方からおおみな大南風が吹き出して、陽気も俄かに暖くなつた。歩兵屯所の八重桜も定めてさんざんに吹き散らされるであらうと、半七は想像した。行く春のならいで、花の散るのは、是非もないが、この大風で火

事でも起こってくれなければいいと案じていると、やがて五ツ

(午後八時)に近い頃に、弥助が眼をこすりながら帰つて来た。

「ひどい風、ひどい砂、眼を明いちやあ歩かれません」

「やあ、御苦労。ひどい風だな」

「御注文の一件は調べて来ました。藤屋のかみさんに訊いてみると、お房の云つたことは少し嘘がまじっています。成程この正月には歩兵の四人連れが来て、借りて行ったには相違ねえが、その勘定はもう済んでいるそうです。お房はやっぱり鮎川という歩兵と訳があつて、なんとか彼かとか名をつけて、屯所へ呼び出しに行くらしい。そこをお前さんに見付けられたので、いい加減のことを云つて誤魔化したのです。お房はことし二十歳はたちですが、その兄

貴の米吉というのは商売無しの遊び人で、大名屋敷や旗本屋敷の大部屋へはいり込んで日を暮らしている。勿論、妹のところへも無心に来る。お定まりの厄介兄貴だそうです」

「お房の相手の鮎川というのは、どんな奴だ」

「こりやあ江戸者じゃありません。武州大宮在の百姓の次男で、実家もまあ相当にやっている。本人は江戸へ出て若党奉公でもしたいと望んでいるところへ、江戸で歩兵を募集する事になったので、早速に願い出て、三番隊の第二小隊にはいることになったそうです。年は二十三で、色の白い、おとなしやかな男で、茶袋の仲間じゃあ花形だという評判です」

「江戸に親類はねえのか」

「さあ、そこまでは判りませんが……」

「そりやあ亀の方の受持ちだから、なんとか判るだろう。今夜はまあこれで帰って、あした又早く来てくれ」

弥助の帰る頃から、風には雨がまじって来て暴れ模様になった。雨と風と、その音を聞きながら半七は寢床のなかで又考えていると、表の戸を叩いて亀吉がぐしよ湿ぬれの姿ではいつて来た。風が強いので、傘は挿せないと言うのである。彼は鬢びんのしづくをふきながら、親分の枕もとに坐った。

「歩兵の一件だけなら、あしたでもいいのですが、ほかに少し聞き込んだ事があるので、夜ふけに飛び込んで来ました」

「どんな聞き込みだ」と、半七は起き直った。

「この頃はどうも物騒でいけません。ゆうべ下谷金杉の高崎屋と
いう小さい質屋へ押込みがはりました」

この頃の江戸はまったく物騒で、辻斬りや押込みの噂は絶えな
い。単にそれだけならば、さのみ珍らしいとも思えなかつたが、
亀吉の報告は確かに半七の注意を惹くものがあつた。

「ゆうべの四ツ（午後十時）過ぎです。その高崎屋へ二人組の押
込みがはいつて、五十両ばかり取つて行きました。番頭はなかな
か落ち着いた男で、黙つてじつと見ていると、ゆうべも陽気がほ
かぼかしたので、ひとりの奴が黒の覆面をぬいで、額の汗を拭い
たり、頭を搔いたりした。すると、そいつの頭には鬚が無かつた
と、こう云うのです」

「鬻がなかつた……」

「自分で切ったか、人に切られたか知らねえが、ともかくも鬻が無かつたと云うのです。髪切りのはやる時期でも、髪を切った押込みはめずらしい。それを眼じるしに御詮議を願いますと、番頭は訴えたそうです」

「実は午過ぎひるに幸次郎が来て、ゆうべ浅草の代地のお園という囲い者の家へ、二人組の押込みがはいつて、そいつらはお園の鬻を切つて行つたというのだ」

「やっぱり二人組ですかえ」と、亀吉は眼をひからせた。

「そうだ」と、半七はうなずいた。「だが、代地の二人組は女の髪を切つて行つた。金杉の二人組は自分の髪を切つている。時刻

から考えると、浅草の奴が下谷へ廻ったと思われねえこともねえが、代地で盗んだ代物しろものをどう始末したか。ほかにも同類があるのか、それとも別の奴らか。その鑑定はむずかしい」

「ちつとこんぐらかつて来ましたね」

「そこで、おめえの受持ちはどうした」

「ひと通りは洗って来ました」

亀吉が探索の結果も、弥助の報告とほぼ同様であった。第二小隊の鮎川丈次郎は武州大宮在の農家の次男で、年は二十三歳で、歩兵仲間にはめずらしい色白の柔にゆうわ和な人間であるが、同じ隊中の者に誘われて此の頃は随分そこらを飲み歩くらしい。天神下の藤屋へもたびたび出かけて、お房になじんでいるのも事実である。

深川海辺河岸の万華寺というのが遠縁の親類にあたるので、その住職が身許になって入隊したのであると云う。鮎川ばかりでなく、髪切りに出逢ったほかの十人も相変わらず調練に出ている。そのほかには別に変ったことも無いらしいと、亀吉は云った。

四

明くれば三月二十六日である。ゆうべの雨かぜも暁あけ方からかりりと晴れて、きようは拭ぬぐったような青空を見せていた。

このごろの騒がしい世の中では、葉ざくら見物という風流人も少ないと見えて、花の散ったあとの隅田堤はさびしかつた。堤どてし

下の田圃では昼でも蛙がそうぞうしくきこえた。その堤下の小料理屋から二人づれの男が出て来た。

ひとりは筒袖だん袋ににらやまがさ葎山笠をかぶった歩兵である。他のひとりは羽織袴の侍風で、これも笠をかぶっていた。かれらは相当酔っているらしく、殊に往来の絶えているのを見て、かなりの声高で話しながら歩いて来たが、やがて堤へ上がって一軒の掛茶屋にはいった。茶屋も此の頃は休んでいるらしく、外圍いのよしず葎簀はゆうべの雨に濡れたままで、内には人の影もなかった。それが丁度仕合わせであるというように、ふたりは片寄せてある長床几を持ち出して、向かい合って腰をかけた。

「暑いな。すっかり夏になった」と、侍は扇を使いながら云った。

「もう日なかは夏です」と、歩兵も云った。「殊にゆうべの雨風から急に暑くなりました」

「では、今の一件を増田君にもよく話して下さい。このくらいで止めては困る……」

「はあ」と、歩兵の返事はすこし渋っていた。

「きようは増田君も一緒に来てくれると好かったのだが……」

「増田君は二、三人づれで吉原へ昼遊びに行つたようです」

「はは、みんな遊ぶのが好きだな」

歩兵隊はドンタクと称して、一、六の日を休日と定め、その日は明け六ツから夕七ツまでの外出を許されている。この歩兵もきようドンタクに外出したものと察せられた。二人はそれから二つ

三つ話して床几を起たつた。

「では、きつと頼みますぞ」と、侍は云つた。

「はあ」と、歩兵の返事はやはり渋つていた。

「米吉が不安心なら、今度は手前から直じきじき々にお渡し申しても宜

しい」

「はあ」

かれらは一緒に連れ立つて行くことを厭うらしく、侍はひと足さきに別れて出て、吾妻橋の方角へ真つ直ぐに立ち去つた。歩兵は後に残つて、暫くぼんやりと考えていたが、やがて立ち上がった表へ出た。桜の青葉を洩れて来る真昼の日のひかりを、彼はまぶしそうに仰ぎながら、堤のむこうへ下りて竹屋の渡しへむかつ

た。

侍も歩兵も笠を脱がなかった。知らない人が聴いたならば、これだけの対話にさしたる秘密を含んでいても思われなかったであらうが、その秘密をぬすみ聴く四つの耳があった。頬かむりをした二人の男が掛茶屋のうしろからそつと姿をあらわした。それは半七と亀吉であつた。

「あの侍を知らねえか」と、半七は小声で訊きいた。

「知りませんね」と、亀吉は答えた。「歩兵は確かに鮎川ですよ」「米吉が不安心なら、直々に渡してもいいと云っていたな」

「米吉というのはお房の兄貴ですよ」

「そうだ」

「もう少し歩兵を尾けてみましようか」

「まず昼間で工合ぐあいが悪いが、もう少し追ってみろ」

渡しが出るよう、と呼ぶ声におどろかされて、亀吉は忽々に堤下へ駈けて行くと、半七はあき茶屋へはいつて煙草を一服吸った。もうこつちの物だと云うような軽い心持になって、彼は堤のまんなかを飛んでゆく燕つばめの影を見送りながら、ひとりで涼しそうにほえんだ。

歩兵隊の髪切りは、猿でなく、狐でなく、豹でなく、人間の仕業であろうと、半七は推測した。もし人間であるとすれば、第一に疑うべきは鮎川丈次郎と増田太平の二人である。ほかの九人はなんにも心あたりが無いと云うにも拘らず、この二人は獣のよう

なものに襲われたと云っている、或いはこの二人がほかの九人の髪を切つて、その疑いを避けるために自分自身の髪をも切つて、まことしやかにいろいろのことを云い触らしているのかも知れないと、彼は思った。

そこで鮎川や増田がなぜそんなことをしたか。それは単なるいたずらでない、自分たちの意趣遺恨でもない、恐らく何者にか頼まれたのであろう。彼等は何者にか買収されて、歩兵隊の威光と信用とを傷つけるために、こんな悪戯いたずらめいた事を続行したらしい。騒動があまり大きくなったので、この頃はしばらく中止しているが、あわよくば小隊全部の髪を切つてしまうつもりかもしれない。

藤屋のお房との関係から、半七は先ず鮎川に疑いをかけた。茶屋女などに関係すれば、金につまる。金につまれば何をするか判らない。その推測が適中して、きょうのドンタクに外出を許された彼は、この向島の小料理屋でどこかの侍と密会している。お房の兄の米吉もその間に立って、金銭取引の中継ぎをしているらしい。ここまで判れば、この一件の解決は時間の問題に過ぎないと、半七は多寡をくくってしまったのである。

まだ残っているのは、代地と金杉の押込み一件で、髪を切られた者と、髪を切っている者と、それに何かの関係があるか無いか、その解決は幸次郎の報告を待つのほかはなかつた。

それからそれへと考えながら、半七はあき茶屋を出て吾妻橋の

方角へ引つ返すと、日ざかりの暑さはいよいよ夏らしくなつたので、彼は葉桜の下を択よつて歩いた。水戸の屋敷の大きい椎しいの木がもう眼の前に近づいた頃に、堤下の田圃で泥鱒どじょうか小鮒をすくつている子供らの声がきこえた。

「やあ、ここに人が死んでいる」

「死んでいるんじゃない。寝ているんだ」

その声が耳にひびいて、半七は堤の上から覗いてみると、堤の裾すその切株に倚よりかかつて、一人の男が寝ているらしかった。

「生酔なまよいだな」と、半七は思った。

それでも念のために、彼は堤を降りて、その男の枕もとへ近よると、男は堅気かたぎの町人とも遊び人とも見分けの付かないような風

体で、いが栗頭が蓬々ほうぼうと伸びているように見えた。彼はたしかに酒に酔って倒れていたのである。

「もし、おまえさん。まっ昼間から何でこんな所に寝ているのだ」と、半七は近寄って揺りおこした。

他愛なく眠っているようでも、どこか油断が無かつたらしく、揺り起こされて男はすぐにはつと眼をあいた。彼は自分の前に立っている半七を見て、俄かに起き直つて衣紋えもんをつくろつた。そうして、無意識のように両方の袖口を引つ張つた。それが法衣ころもの袖をあつかうような手つきであると、半七は思つた。

「おまえさんは坊さんかえ」と、半七は訊いた。

「なに、そうじゃあねえ」と、彼は少し慌てたように答えた。

「おらあ職人だ」

「めずらしい職人だな。そんな頭で出入り場の仕事に行くのか」
「喧嘩のもつれで、鬚を切ったのだ。毛の伸びるまでは、仕事にも出られねえので、よんどころなしにぶらぶらしているのよ」

彼は三十前後の蒼黒い男で、どうも破戒のげんぞく還俗僧らしいと半

七は鑑定した。彼は半七の相手になるのを避けるようにわざとらしく欠伸あくびをして、眼をこすりながら歩き出そうとすると、ふところから重い財布がずしりと地に落ちた。彼はあわてて拾おうとすると、半七はその手をおさえた。

「おい、待ってくれ。落とし物はよつぽど重そうだな。おれに見せてくれ」

「見せてくれ……」と、男は眼をひからせて半七を睨んだ。「ひとの懐中物をあらためてどうするのだ。おめえは巾着切りか、追剥ぎか」

「追剥ぎはそつちかも知れねえ」と、半七は笑った。「まあ、見せろよ」

「てめえたちに見せるいわれはねえ」と、男は半七の手を振り切つて、財布を自分のふところへ捻じ込んだ。

「ぬすびとの昼寝ということもある。そんなに重そうな財布をかかえながら、往來に寝込んでいるから調べるのだ。おれが調べるのじゃあねえ。この十手が調べるのだ」

半七はふところから十手を出した。

五

その翌日、半七は歩兵屯所へ出頭して、小隊長の根井善七郎に面会を求めた。

「あなたは二十四日の晩、浅草代地河岸のお園という女うちの家へ押込みがはいったのを御存知でしょうか」

「知らない」と、根井は答えた。「そのお園という女は何者だ」「実は……」と、半七は声を低めた。「大隊長の囲い者でござい
ます」

大隊長箕輪みのわかずえ主計之助は六百石の旗本である。それが代地河岸に

妾宅を持つていようとは、根井も今まで知らなかつたのである。

箕輪も勿論、秘密にしていたに相違ない。それを半七にあばかれて、根井は他人事ひとごとながらも少しく極まりが悪そうに顔をしかめた。

「して、それがどうかしたのか」

「子分の幸次郎に調べさせましたら、お園の旦那は箕輪の殿様だということがわかりました。お園は二人組の押込みに髪を切られたのでございます。」

「髪を切られた……」と、根井はいよいよ顔を曇らせた。「箕輪氏の困うじい者と知つての業わざかな」

「そうだろうと思います」

「その髪切りは歩兵の一件と何か係り合いがあるのだろうか」

それはこの場合、誰の胸にも浮かぶ疑問である。半七は更に声をひくめた。

「係り合いがあるように思われます。まさか大隊長の髪を切るわけにも行かないので、お妾さんの髪を切ったらしいのでございませぬ。油断をしていると、この屯所の中でもまだまだ切られる者があるかも知れません」

根井もおおかた覺さとつたらしく、これも声を忍さとばせた。

「では髪切りは……。屯所内の者の仕業だな」

「鮎川丈次郎、増田太平の二人だろうと思います」

「鮎川と増田……。確かな証拠があるかな」と、根井は形をあらためた。

「きのうの午過ぎひるに、向島の水戸さま前の堤下で、怪しい者を召し捕りました」と半七は説明した。

「坊主あがりで、懐中には二十両ほどの金を所持して居りました。手向かいするのをおさえて、だんだん詮議いたしますと、深川海辺河岸の万華寺の納所なっしょあがりで、良住という者でございました。御承知の通り、万華寺の住職は鮎川丈次郎の親類でございます。良住は身持ちが悪いので寺を逐おい出され、今では居どころも定めずごろ付いて居りますが、万華寺にいた縁故から鮎川とも知合いでございます。まだお話を致しませんでしたが、同じ二十四日の晩に、下谷金杉の高崎屋という質屋へも二人組の押込みがありました。その一人は髪を切っていたと云うことでしたが、この良

住は還俗するつもりとみえて、いが栗頭を長く伸ばしていて、鬚を切ったような形にも見えます。その上、懐中には身分不相当の大金を持っているので、こいつが下谷の押込みではないかと睨みまして、きびしく吟味すると案の通りでございました」

「もう一人の同類は誰だ。鮎川か」と、根井は待ち兼ねたように訊いた。

「いえ、これもあなたが御存知のない者で……。湯島天神の藤屋という小料理屋に女中奉公をしているお房という女がございました。その兄の米吉というならず者でございます」

「では、この二人は屯所に関係はないな」

「左様でございます」

しかし、まったく関係がないとは云えない。鮎川丈次郎はお房の關係から彼の米吉と知合いになった。そうして、米吉の手から金銭をうけ取って髪切りの役目を引き受ける事になったらしい。増田太平も遊蕩の金に困って、鮎川と米吉に誘い込まれたのであらうと、半七は説明した。

燈台もと暗しと云うか、足もとから鳥が立つと云うか、自分の部下からこの犯人を見いだして、小隊長も頗る意外に感じたらしい。それにつけても第一の問題は、かれらを買収して髪切りのいたずらを実行させた本家本元である。根井は暫く考えながら云った。

「こんにちの世の中だから、誰が何をするか判らないが、それに

ついでにはどうも心あたりが無い。お前にはもう探索が届いているのか」

「還俗坊主を取りおさえただけで、その相棒の米吉の居どころがまだ判りません」と、半七は答えた。「良住は髪切り一件には係り合いがないと云つて居ります。そんなわけで、誰が金を出して、誰が頼んだのか、そこまでは探索が行き届いて居りませんのでございませぬ」

「むむ。鮎川と増田を詮議すれば判る筈だ」

「それで今朝うかがいましたのでございませぬ」

「よく知らせてくれた」と、根井はすぐに立ちかけた。「そこで、代地の一件だが……。お園という女の髪を切ったのは誰だ。やは

り鮎川と増田かな」

「まあ、そうだろうと思いますが……」

屯所は夕七ツが門限で、その以後の外出は許されない筈である。それにも拘らず、歩兵らは往々夜遊びに出る。今後はその取締りを嚴重にしなければならぬと、根井は云った。鮎川も増田も夜なかに脱けだしてお園の宅を襲ったのであろう。こういう無規律であるために、歩兵の評判が悪いのである。根井もそれを知っているながら、自分一個の力ではどうにもならないらしかつた。

それでも彼は半七の手前、今後はきつと取締まると繰り返して云った。

「これから鮎川らを即刻吟味する。おまえは暫く待つてくれ」

云い残して根井は忽々に出て行つたが、やがて又引つ返して来た。

「増田は練兵所に出ていたので、すぐに吟味する事にしたが、鮎川は昨夜から帰隊しないそうだ。あるいは覺つて逃亡したのかも知れない」

「子分の亀吉に云いつけて、鮎川のあとを尾つけさせてありますから、その居どころは判る筈でございます」と、半七は云つた。

「あいつ、又ほかにも悪い事をして、市中取締りの手に召し捕られたりすると、歩兵隊の不面目だ。おまえに頼む。見つけ次第に取りおさえてくれ」

その当時の市中取締役は庄内藩の酒井左衛門尉のじょうである。その巡

邏隊と歩兵隊とは、とかくに折り合いが悪く、途中で往々に衝突を演ずることがある。市中取締りの立場からいえば、乱暴をはたらく歩兵隊を取締まるのは当然であるが、それが歩兵隊の癪にさわるので、両者は常に睨み合いの姿になっている。鮎川の召し捕りを半七に依頼したのも、彼を巡邏隊の手に渡すまいという根井の用心であるらしい。それを察して半七も請け合つて歸つた。

三河町の家へ歸ると、亀吉が待つていた。

「あれから鮎川のあとを追つて行くと、竹屋の渡しを渡つて今戸へ越して、それから花川戸の方角へぶらぶらやつて来ると、むこうから米吉の野郎が来て、両方がばつたりと出逢いました。こりやあ面白くなつたと思うと、往来のまん中で立ち話、これにやあ

どうも困りました。真つ昼間の往来だから近寄ることが出来ねえ。ただ遠くから様子を窺っているだけのことでしたが、二人の様子が唯でねえ。なにかもんちやく捫著でもしているらしい風に見えました。が、なにしろ人通りの多い所だから、二人もいつまで捫著してもいらねえので、まあいい加減に別れてしまったようです。鮎川はそれから天神下へ行つて、例の藤屋へはいり込みました」

「その鮎川はゆうべから屯所へ帰らねえそうだ」

「野郎、泊まり込んでいやがるのか。それともお房を引つ張り出して、駄げ落ちでもしやあがつたかな」と、亀吉は半七の顔色をうかがった。「どうしましょう。すぐに藤屋へ行つてみますか」

「そうだ、駄げ落ちなんぞをされると困る。構わねえから、見つ

け次第に押さえてしまえ。小隊長から頼まれているのだ。早く行つてくれ」

亀吉を追い出してやると、入れちがいに弥助が来た。

「親分。藤屋のお房はゆうべから帰らねえそうです」

「鮎川と一緒にか」

「そうです。明るいうちから鮎川は飲みに来ていて、日が暮れて屯所へ帰る。お房はそれを送りながら一緒に出て行って、それっきり帰らねえそうですよ」

「困ったな」

半七は歎息した。亀吉が根気よく藤屋に張り込んでいたならば、鮎川とお房の消息を探ることが出来たかも知れなかったのである

が、藤屋へはいるまでを見届けて、これから先は例の通りと、見切りをつけて引き揚げてしまったのが、今更おもえば不覚であった。その不覚のために、この事件の一半を不得要領に終らせることになった。

六

「なんでも油断をしちやあいけません。亀吉がうつかり油断した為に、折角の探索をめちやめちやにしてしまつて、当人も後々まで悔んでいましたよ」と、半七老人は云つた。

「二人のゆくえはどうとう知れないんですか」と、わたしは訊きい

た。

「知れませんが。幸次郎をやつて、鮎川の故郷の大宮在を探索させましたが、そこへも立ち廻つた形跡がありません。勿論、江戸市中や近在には姿をみせず、そのうちに御一新の大騒ぎですから、そんな詮議をしてもいられません。明治になつたのは二人の仕合わせで、どこにか天下晴れて暮らしているでしょう。世の中が變ると、思いも寄らない得とくをするものも出来ます」

「増田の方は捉つかまつたんですな」

「これは前に申した通りで、髪切りは全く鮎川と自分の仕業に相違ないと白状しました。代地河岸のお園の家へ押込んだのも、二人の仕業でした。ところが、これも困つたことには吟味中に押込

み所を破つて逃げてしまいました。歩兵隊も重々不取締りで致し方がありません」

「一体、誰に頼まれたんですか」

「それが肝腎の問題ですが、増田は鮎川と米吉に誘い込まれて、最初に十五両、二度目に十両貰っただけで、その頼み手は知らない」と強情を張っていました。何分にも一方の鮎川が見付からないので、詮議も思うように撈取はかどらない。そのうちに増田は逃亡してしまつて、これもゆくえ不明ですから、詮議の手蔓も切れたわけです……。こんにちの言葉で申せば五里霧中です」

「しかし、まだほかに米吉がいる筈ですが……」

「その米吉が又いけないのです」

「どうしました」

「王子辺の川のなかで浮いていました」

「殺されたんですか」

「豹に啖くわれて……」

「本当に啖くわれたんですか」

「と、まあ、云っているのですが……」と、老人は笑った。「わたくしはその死骸を見ませんでした、なにかの獣けものに体を啖くわれていたそうです。野良犬に咬まれたのでしようね。坊主あがりの良住と一緒に押込みを働いて、ふところは相当に重い筈ですから、どこかの大部屋へでも遊びに行つて打ち殺されたか、ごろつき仲間でも狙われたか、それとも別に仔細があるのか、ともかくも

誰かに打ち殺されて、死骸を王子辺のさびしい所へ捨てられた。それを野良犬どもが咬み散らして、川のなかへでも転がし込んだのでしよう。しかしその当時は豹に啖い殺されたという評判でした」

「観世物の豹は本当に逃げたんですか」

「逃げたというのは例の噂で、上州から野州の方を持ち廻つていたのだそうです。しかし、米吉の死んだのは本当です」

「そうすると、詮議の種も尽きたわけですね」と、わたしも失望したように云った。

「まあ、そういうことになります。良住という奴は髪切り一件に關係が無いとすれば、あとは鮎川と増田ですが、この二人はいず

れも行方不明、お房も同様、残る米吉は豹に啖われたと云うよう
なわけですから、関係者は種切れです。そこで、屯所側の鑑定で
は、この事件のうしろには大名屋敷の黒幕が付いていて、鮎川ら
を操あやつつて歩兵隊にケチを付ける計画だろうと云うのでした。幕府
反対の大名たちが……と云つても主人が知つたことじゃありま
すまいが、その家来たちがいろいろの策動をして、幕府困らせを
やる。今度の一件も薩州屋敷あたりの者が内々で運動費を使つて、
こんな悪いたずら戯わらをして、幕府の歩兵の信用を墜おとさせようと企てたの
であろうと云うのです。今から考えると、子供のような悪戯とも
思われませんが、その時代にはこんな悪戯もなかなか有効であつた
のですから、誰かが考え付いたのかも知れません。

果たしてそうだとすれば、米吉という奴は博奕を打つので大名屋敷の大部屋へはいり込む関係から、こいつが先ず誰かに買収されたものと想像されます。米吉はお房の縁で鮎川を抱き込む、つづいて増田を味方に引き入れる。狂言の筋立ては大方こんなことでしょう。昔から悪い事をする人間はみんなそうですが、鮎川も増田も自分の髪を切られたことにして、唯黙っていればいいのに、この二人だけが何か髪切りの正体を見たようなことを云って、天らうど鷲絨らうどのような手ざわりがしたとか、獣のような物に出逢ったとか云い触らしたのが失敗のもとで、かえってわたくし共に眼を着けられる事にもなったのです。

増田の申し立てによると、自分も鮎川も歩兵隊にはいったもの

の、毎日の調練が忙がしく、なかなか辛抱がつづかない。その上にいつか道楽の味をおぼえたので、猶さら屯所の生活が窮屈でならない。いつそ脱走でもしようかと云つているところへ、髪切りの一件をたのまれたので、金がほしさに引き受けたが、その詮議がだんだん嚴重になつたので、なんだか薄気味悪くなつて来た。その矢先きへ、ある所から米吉を通じて、大隊長の妾宅を襲えという秘密の命令が来ました。そこで、二人は相談して、いつそこらで強盗を働いて、纏まつた金をこしらえて脱走しようと言ふことになつたのです。妾の髪を切れば二人に十五両ずつ呉れるという約束でしたが、そのお金を米吉が途中で着服して、二人に渡さない。その捫著のあいだに、氣の弱い鮎川は思い切つてお房と

駈け落ちをしてしまう。思い切りの悪い増田はぐずぐずしているうちに取り押さえられたのです。妾宅で盗んだ品々は米吉の家へ持ち込んだままで、まだ処分されずに残っていたので、みんな無事にお園の手へ戻りました」

「米吉というのは随分悪い奴ですね」

「元来は大した悪党でもないのですが、急に悪度胸が据わったと見えて、鮎川や増田をあやつって旨い汁を吸っていながら、一方には自分も良住と一緒に押込みを働く。何やかやでかなりにふところを肥やした筈ですが、悪運尽きて忽ち滅亡、殺した者は大部屋の仲間でもなく、ごろつき仲間でもなく、ひよつとすると例の屋敷の連中が秘密露頭の口を塞ぐために、急所の当身あてみでも喰わせ

たかも知れませんが。まあ、大体のお話はこんなことで、その以上はわたくしにも判り兼ねます」

「結局、その陰謀の策源地は判然はつきりしないのですね」

「薩州だろうの、長州だろうのと云つても、所詮は当て推量で、確かな証拠もないのですから、表向きの掛け合いも出来ず、この一件はうやむやに済んでしまいました。三田の薩摩屋敷には大勢の浪人が潜伏していて、とにかく市中を鬧さわがすので、とうとう市中取締りの酒井侯の討手がむかつて、薩摩屋敷砲撃と相成つたのは、どなたも御存じのことでしょう。あの砲撃のために、芝の金杉、本芝、田町たまちの辺はみんな焼けました」

「良住という坊主は、本当になんにも知らないんでしょうか」

「万華寺の関係から考えると、良住は鮎川の秘密を知っていていそうに思われるのですが、本人はどうしても知らないと言いつ張っていました。これも吟味中に牢死という始末で、何もかもうやむや……。こんな事件もめずらしいのです」

云い終つて、老人はまた思い出したように溜め息をついた。

「めずらしいと言えば、ここに少し不思議なお話があります。慶応三年十二月十三日、歩兵隊が吉原で喧嘩をはじめて、廓内の者や弥次馬に取り囲まれ、十幾人が半死半生の袋叩きに逢いました。そのなかには重傷で死んだものもありました。死んだのはみんな髪切りに出逢つた連中だという噂で……。わたくしも何だか変な心持になりました」

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（五）」光文社文庫、光文社
1986（昭和61）年10月20日初版1刷発行

入力：tat_suki

校正：小林繁雄

1999年6月5日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

半七捕物帳

歩兵の髪切り

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>